

# 地理学から見た『明治欧米見聞録集成』

—— 澁澤榮一の場合 ——

大 嶽 幸 彦\*

(平成15年4月24日受付；平成15年6月3日受理)

## 要 旨

本稿は、明治36年発行の澁澤榮一著「欧米紀行」を地理学の立場から分析し、考察を加えたものである。本論では澁澤榮一の一行が見聞した主な事象を取り上げ、若干の地理学的考察を試みた。

## KEY WORDS

Reports of Travel on Europe and the United States	欧米紀行
Eiichi Shibusawa	澁澤榮一
Promotion of Industries	殖産興業

## I はじめに

筆者はこれまで明治20年頃の『欧米巡回取調書』を基にフランス国、ドイツ国、ベルギー国、スイス国、その他を中心に、地理学の観点から内容の分析を試みて来た。<sup>1,2,3,4)</sup>それは欧米を巡回した谷農商務大臣以下6名が、中央行政、地方行政を始めとして各国で調査し、蒐集した資料を取りまとめた記録の分析である。筆者は、拙著『国際化時代の地理学』<sup>5)</sup>以来、ヨーロッパに出かけて行って異文化に接し、彼我の比較を試みた記録、旅行記の分析を試み、拙著『旅と地理思想』にまとめてきた。<sup>6)</sup>本稿は、以上の分析とは異なるが、澁澤榮一が欧米を巡回した際の見聞につき、さまざまな観点からの分析を行なったものである。<sup>7)</sup>澁澤榮一一行の旅行は169日間で世界を一周して来たこともあり、地理学が研究対象とする各国の地勢、気候、習俗等についての見聞は『欧米巡回取調書』に比べてもはるかに少ない。各国の地理について現地で体験するには、かなりの長期滞在を必要とするからである。しかし、本文中には地理的な記述が各所で短くまとめられている。

澁澤榮一は明治・大正期の大実業家としてよく知られているが、簡単に経歴を述べておきたい。マイクロソフト・エンカルタによれば、澁澤榮一は1840年生まれ、1930年に亡くなった明治・大正期の指導的実業家である。武蔵国榛沢郡血洗島（埼玉県深谷市）の富裕な農家に生まれた。成人後、江戸に出て尊王攘夷運動に参加したのち、一橋家人用の推挙で1864年（元治元年）一橋家につかえた。とくに財政運用に才能をみせ、当主の一橋慶喜の將軍就任とともに幕臣となった。1867年（慶応3年）慶喜の弟の昭武にしたがってヨーロッパ諸国を歴訪し、近代の技術や経済制度にめざめた。明治新政府になると、民部省・大蔵省にはいり、国立銀行条例

\* 社会系教育講座

などを起草立案して財政制度の確立につとめたが、1873年（明治6年）に財政運用をめぐる対立で大蔵省を辞任した。その後は民間で各国立銀行の設立や、合本主義とよんだ株式会社方式による各種の近代的企業の設立を指導したが、それは日本の近代産業の発達を望んだもので、自らが財閥化する道をえらばなかった。1909年からは各事業の役職から身をひき、社会・公共事業につくし、国際親善にも貢献したとある。本稿で取り上げた『明治欧米見聞録集成』の本文の中にも、濫澤の経歴の一端が読み取れる。

濫澤が元々企画した欧米旅行のねらいは次に見るように、気楽な漫遊旅行であった。「自分の旅行は単に自由旅行にしてつまり三十四五年前に一度洋行を致したなりであるからその後の開明が如何なる程度に進んだかと言う事及び近来米国の物質的文明の進歩が著しきものととの事故老後の思い出に欧米諸国を一巡したいと言う希望に過ぎないのであります」（原文の p.69, 以下の引用では原文を省略）。しかし、出発前に朝鮮協会、龍門社、東京銀行集会所、東京会議所、朝日会、首相官邸その他で盛大な送別会を受け、経済界各国の商工会議所への訪問・視察を頼まれている。

「日本の経済界に功労あり、経験のある先生がお出掛け下されてあちらの人々と種々お話し頂くだけでも間接にです極く広き意味の利益を得る」と（p.16）。

しかし、日本流の顔つなぎ・名刺の交換は時に意味を持たないこともあった（p.364）。濫澤榮一は若き頃、バリ万博使節団の一員として訪米していることは次に見るとおりである。

「其の昔私が欧羅巴へ参りましたのは慶応三年で慶応三年一月十二日横浜を發程して慶応四年即ち明治元年十一月三日に日本に帰ってきたと覚えております」（p.22）。今回の旅に比べて1年10カ月近くと長かったことがわかる。幕府下僚時、ベルギーでの体験としては、次のものがある。

「大變に自負する役人が商人に対して極く敬意を表するどうも己の国とは商工業者の待遇が大層違ふということをひどく感銘いたしました」（p.28）。

士農工商の意識が抜けきれない日本から見ると、商人が重んじられている事実に濫澤はいたく驚くとともに、明治日本の将来を牽引するのは商工業であるとして、IIで検討するように工業を精力的に視察しているのが、濫澤榮一が大物たる所以であろう。

一行は濫澤男爵及び令夫人、随行員として萩原源太郎（東京会議所書記長）、八十島親徳（男爵秘書）、西川愛喜子（男爵夫人通訳）、濫澤元治（工学士、本文中から甥であることがわかる。筆者注）等であった。明治35年5月15日、横浜港を出発し、同年10月30日に神戸港に帰国している。169日間の旅であった。行程図を見ると、船、列車による世界一周の旅である。

以下、『明治欧米見聞録集成』の記述の中から濫澤が見聞した主な事象を取り出してみよう。

## II 見聞した主な事象

全体の日程が急ぎ足のためか、地理的描写や考察は比較的少ないが、本文の中で数行ずつ簡潔に記されている。

例えば、地勢については、

「午後2時15分汽車にてグラスゴーに向かう。——汽車英蘭を離れ蘇格蘭に入る地勢酷だ日本に似て山水の観るべきものあり山頂山腹牧場多し」（p.264）。

スコットランドの地形が日本に似ているものの、土地利用が異なっていることに注意してい

る。

夏のヨーロッパに滞在するとわかるが、午後9時頃暗くなる1日の長さについては、

「英国は緯度北に偏し其の地位樺太島の北端に相当するを以て夏季は日甚だ永くして日の没して全く夜と為れるは午後9時過ぎなり」(p.311)のように記されている。イギリスの最南端、ランズエンド Land's End 岬(文字どおり地の果てにある岬、筆者注)でさえ、北緯50度をこえているとは想像しにくい。

景観についての記述、「ニューカッスルを辞しシェフィールドに向かい午後1時同所に着しピクトリアホテルに宿す両駅の間満目平野牧場丘阜起伏して田畑その間に介在するのみ」(p.273)や、ベルギーの田野についての観察、「この国田野の状況は耕運整頓し英国に比して一層稠密なり殆ど本邦田園を見るの感あり」(p.290)と集約的な土地利用から日本を思い出している。その他、パリ・リヨン間の車窓観察、「車中囑目すれば丘陵起伏集落点在田野あり牧場あり」(p.383)、サンフランシスコからシカゴへ列車で移動する際の合衆国農業の展開について、「これ等の土地は鉄道レールの両側は皆耕作地若しくは牧場であります其の農業の富源は推し量られぬようであります見渡す限り田野で実に広大なものである且つ其の地味も豊沃である様に思いますさり乍らこの土地に耕作する人は極めて少ない殆ど人無しと云う有様で——」(p.461)などが主なものである。現在はさらに大規模経営であり、大型のトラクター等で耕作しているから、人の姿を見ることはむずかしい。

比較的長く滞在したニューヨークについては、市街の様子、特にダウントウンの都市機能を説明している(p.191)。しかしながら、現地であらゆる観察したものが少ないため、皮相な面しか捉えていないのはいたし方あるまい。

日程をかせぐためか夜行列車も時々使っているが、地理的観察をするには日中地図を片手に移動すべきであり、暗くなってきた時には宿を取って、その日の整理をすべきであると教えられ実践してきた筆者にとっては、途中の描写が記されておらず物足りない。しかし、列車の待ち時間を利用して、濫澤の一行は市内を遊覧しており(例えばp.99)、日程の詰まった旅では、少しの空き時間を利用して駅前や市内を歩き回することは、地理的素養訓練の第一歩を実行していることと評価できる。

本文では日程順に訪問先が次々と詳しく列記されている。全てを取り上げると煩雑になるので、主な例だけを簡潔に、以下挙げることにする。土日も静養せずに、何かと動き回っていることが見聞録からわかるが、さすがに工場見学は出来ない。海外にあって、日程の余裕のない今日の旅行でも、土日に動き回る習性は変わっていないようである。

明治35年6月2日(月曜)は最初の上陸地サンフランシスコのユニオン鉄工場を訪問している。

「工場は米国著名の造船所にして1884年の創設に係り軍艦及び商船を製造する」とある(p.96)。民間の需要に対してだけでなく、軍事用の受注も受けている点が注目される。

6月9日(月曜)はシカゴのユニオンストックヤード(合同屠殺場)を視察している。

「器械を使用し、牛、豚、羊1週間に6万頭内外の平均に当り牛は1時間に240頭、豚は750頭を殺し皮を剥ぎ腸を出し四肢を膝口より切り去る等々を分業に属し、——」と記録している(p.106)。

6月11日(水曜)はピッツバーグ、カーネギー工場を訪問している。工場の原動力として「ガス・石炭を併用せり当州(ペンシルベニア州、筆者注)は米国唯一の石油産出地なるを以て

天然ガスに富み、——交通機関の発達し天然の生産物に富めるこの地に工場をトしたるはカーネギー氏の今日を致せる所以にして米国第一の工場地と称せらるるは良に故あるなり」と考察している (p.116)。当時はペンシルベニア州が唯一の石油産地であったとは、今日からは想像できない。ピッツバーグにはアイロンビールで知られたビール製造会社もある。

6月13日(金曜)はプリンモア女子大学を参観したり、ジラード孤児院を訪問している。「ジラードコレッジはフランス出身の大実業家ジラード氏の寄付金に成立した世界著名の慈善孤児院である」(p.122)。生徒1600人あまりを収容しているという。

ニューヨークでは水性ガス工場、石炭ガス工場、電気工場を巡覧している (p.150)。

6月21日(土曜)はナイアガラ瀑布を觀賞するとともに、ナイアガラフォールパワー会社の発電所を見学している (p.153)。観光のついでに視察の目的を忘れないのはさすがである。

6月24日(火曜)はニューヨーク手形交換所・興信所を視察し、同商業会議所で歓迎会を受けている (p.161)。

6月27日(金曜)はボストンからウォルサム市に至り、懐中時計の製造を見学している (p.171)。「時計機械の総数は日々20余万個の巨額にして、毎日3000個の懐中時計機械を仕上ぐという」(p.171)。工場巡覧の後、女工の寄宿舎を見ている。

「舎内は未婚男子の出入を禁じ寢室、浴室、便所等の構造より食堂に至る迄設備間然すべきなし」(p.172)と欠点の無さに驚いている。

リン市ではエーイーリッツル製靴会社を訪ね、操業を見ている (p.221)。

6月28日(土曜)はニューヘブーン市にあるエール大学を訪ねている。夏期休暇中であり、授業を見ることは出来なかったが、教室、試験室、運動場、金石標本室、寄宿舎、図書館等を縦覧している (p.183)。日本の感覚では、1学期であり、土曜日でも学校がある日である。慣習の違いに戸惑うことの1例である。

イギリスに来てからも各地を訪問し、記録に残していくことが続く。

7月30日(水曜)にはリバプールの綿花取引所を見学している。

「仲買人数百名群集し売買盛んなり——仲買人と為るには一定の制限あり漫りに加入する能はず其の欠員を生じたる場合には希望者中より投票を以て之を選抜す」(p.259)とあることから、仲買人の信用は厚いという (p.259)。次にリバプールの穀物倉庫を見ている。

8月2日(土曜)はグラスゴーのフェーヤフィールド会社の造船工場を訪れ、進水式に立ち会っている (p.265)。

8月4日(月曜)はグラスゴーの市役所を訪れている。

「伊太利及び本国産の「アナバスタ」と称する大理石の一種を以てて登まれ会食堂の如きは絵画及び彫刻を以てて之を裝飾せり」(p.268)とあるように荘厳さに驚いている。筆者は1978年9月の日仏地理学会議の際、会場となったマルセイユの商業会議所の荘厳さに驚いたことを覚えている。<sup>8)</sup>

8月5日(火曜)はニューカッスル市内にある兵器、造船の両工場を視察している。

8月11日(月曜)はテムズ川下流のベクトンにあるロンドンガス会社を訪問している。石炭の陸揚げや水性ガス工場、副産物の精製所などを見学している (p.279)。河岸に2大埠頭を設け、大クレーン(起重機)で船より石炭を汽車に積み、ガス工場に運搬している様子を見学している (p.279)。

8月22日(金曜)はリエージュにあるベルギー第一の鉄工場を訪れている。

「リエージは石炭の産地にして白耳義工業の中心たり同社構内に石炭坑あり社内自用鉄道の延長35哩（マイル、筆者注）に亘る一行は之に塔じ鉄工場、製鋼場、レール工場、石炭坑等を巡覧せり」と記している（p.306）。この当時、原料の鉄は近くのロレーヌ地方から運んで来た内陸型の鉄工業である。

8月23日（土曜）はエーソー村にある板硝子会社を見学している（p.307）。この会社は鏡用の厚板硝子専門の大工場である。

ドイツでは有名なクルップ会社を8月25日（月曜）に訪問している。

「製鋼、器械、兵器、車輛等の各部に分れ大小精粗其の作業悉く機械の作用に成らざるなく世界唯一の大工場として結構の壮大、秩序の整然真に驚くに堪えたり」と（p.310）。

クルップといえば、敵にも味方にも大砲等の武器を売り、軍事産業でおおもうけした、いわゆる死の商人であることはよく知られていよう。しかし、クルップ氏について、慈善事業にも力を入れていることに触れ、次のように述べている。

「職工20年以上勤続する者には終身年金を給し配偶ある者には家屋、家具、花園を給し」とある（p.312）。クルップ氏は合衆国のカーネギー氏に匹敵するとしている。後年の濫澤榮一が慈善事業に熱心だったのもこれに倣ったといえなくもない。

ベルリン滞在中、シーボルトが訪ねて来て、濫澤榮一と数時間話している。

「午後に至り、シーボルト男来訪す男は元和蘭人後独逸に帰化しウルテンブルグに居住せり嘗て永く職を日本政府に奉じ日本語に巧みなり男爵が36年前徳川民部大輔に随従して仏蘭西に在りしとき共に各国を巡回したることあり爾来交情浅からず」とある（p.316）。

8月28日（木曜）は午前中シーメンス、ハルスケ電気会社、午後はアルゲマイネ電気会社を視察している（p.318）。後者は市内に4工場が分散し、発電機、電動機、変圧器、安全器等を製造している。

9月16日（火曜）はリヨン近郊の織物工場を巡覧している。工場はブルゴアン町にあり、ジェドリシ織物機械製造所及び製織工場である。

「同社の織物器械は斬新精巧を以って全世界に識られ我が京都、桐生、紫野各絹織物会社の器械は皆該品を使用すと云う」（p.386）。

以上、煩雑さを厭わずに主だった訪問地の例を挙げてきたのも、濫澤氏の一行が夜を日に継ぎ、如何に精力的に工場等を見て廻ってきたかの一端を示したかったにほかならない。見聞録集成には、その他、様ざまな見聞が記されているが、以下、特記事項として、いくつか取り上げて見たい。

### III その他の特記事項

海外で日本人が稀であった明治中期に、一行に対する各国民の態度は次にみるように様ざまである。

「一行の巴里街頭を散策するや行人は往々顧みて呼ぶに日本人を以ってし絶えて周囲に群集せず——これに反し紐育シカゴ費府附近は行人四辺に集まり皆目してシナ人と云い甚しきは

瓦礫を放つ者あり白耳義しかり独逸又然り只英国は行人の顧みる者更になく随って集まることはなし——其の国人の沈着にして礼節を重んずる誠に大国人の態度を示すに足る——」と述べている (p.382)。外国人慣れしている英仏とそれ以外の国々の対応の違いということになるのか。

濞澤いわく「日本帝国未だ欧米に知悉せられず」のためである (p.383)。日清戦争に勝って軍勢力では日本が知られていても、日本や日本人そのものはよく知られていないということである。本稿のテーマとする異文化に接した時の反応については、以下、濞澤の「欧米紀行」の中からいくつか取り出してみたい。

旅行中は人物に対し、偏見を持ちがちであるが、インド人に対して次のような記述がある。

「土人は印度人の種族に属し皮膚黒褐容貌身幹は欧米人に酷似すと雖も柔墮にして魯鈍得るところの財貨は挙げて飲酒喫煙の料と為り赤裸条々四時を緑草茂樹の間に送り飽食惰眠人面にして獸行なるもの其の状憐れむべし」と述べている (p.405)。夏のインドは猛暑であるから朝晩の比較的涼しいうちに働き、日中は体を休めている点が急ぎ足の旅行者には怠惰に見えたということである。

英国の人物に対しては、「極く沈着にして公会の席も家庭の中も事務を処理するも遊行をするも総べて軽率ではありませぬ——意気傲岸にして世界の中心というものは英国である——」(p.465)と述べたり、「一寸の交際は甚だ無愛想人の如く見えますが能く親睦しますると誠に親切なものであります」とも捉え、高く評価していることがわかる。

最後に、ベルギーの国民性については次のように帰朝報告している。

「人民は極く穏和なる国柄で又交際には巧者の国と申してよかろうと思います」(p.472)。

フランス、ドイツ、オランダ等に挟まれて国語もフランス語、フラマン語等を使わざるを得ず、長年バイリンガースの国として外交を磨いてきたためと、当時の植民地経営で得た富を受益していたため、人びとに余裕があったと考えられる。

濞澤榮一自身についていえば、出発前の歓送会や旅行中の所感、帰朝後の報告会での演説に様々な卓見を述べているが、本稿の趣旨からはずれるのであえて引用はしない。また、訪問地の新聞に大実業家として紹介され、インタビューも受けている (例えば、p.145)。公式訪問でもないのに、合衆国大統領と40分近くも会談しているが、「官命を帯びざる外人を引見したるは稀有の特典なりと」(p.136)と言われるほど、濞澤の合衆国訪問は重責を果たしたと言えよう。

#### IV おわりに

本稿は『明治欧米見聞録集成』の復刻版が平成元年に出版されたのを機会に、その内容について地理学の立場から分析を試みたものである。しかし、地理的内容を多々含んでいるかどうかは著者の興味がどこにあるか、ゆっくりと観察しながら旅行したかどうかにかかっている。IIで分析したように、地理的描写や景観に関する記述等はあるにはあったが、船、列車で世界を一周するという明治後期の交通事情からして急ぎ足になった点は否めない。

ただ、一行が日本の商工業の発展のために精力的に各国の工場を見学したり、大学、福祉施設等にも目を配りながら訪問したことは明らかになった。筆者は『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』を中心にヨーロッパ各国の事情を殖産興業の観点から分析してきたが、今回は濞澤一行

の旅行見聞録を分析することで、ヨーロッパの違った側面の一端を提示できたかと考える。

## 注

本稿は1冊の本を中心に引用しているため、注の欄は特にもうけず、本文の中で（——、筆者注）として補足説明するか、引用ページをあげることで注の代わりとした。

## 引用文献

- 1) 大嶽幸彦 (1997)：「地理学から見た『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』——フランス国を中心に——」上越教育大学研究紀要, 第17巻, 第1号, 319~330
- 2) 大嶽幸彦 (1999)：「地理学から見た『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』——ドイツ国を中心に——」上越教育大学研究紀要, 第18巻, 第2号, 645~654
- 3) 大嶽幸彦 (2000)：「地理学から見た『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』——ベルギー国を中心に——」上越教育大学研究紀要, 第19巻, 第2号, 397~405
- 4) 大嶽幸彦 (2003)：「地理学から見た『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』——スイス, 他を中心に——」上越教育大学研究紀要, 第22巻, 第2号, 613~619
- 5) 大嶽幸彦 (1980)：『国際化時代の地理学』, 大明堂, 125P
- 6) 大嶽幸彦 (1990)：『旅と地理思想』, 大明堂, 139P
- 7) 濫澤榮一 (1903)：『欧米紀行』, 文学社, 488P (ゆまに書房より『明治欧米見聞録集成』第26巻として復刻, 平成元年発行, 535P なお本文からの引用は旧版のページ数に拠った。)
- 8) 大嶽幸彦 (1979)：『ドイツ文化と日本人』, リージョナル・ブックス, 古今書院, 185P

本稿と関連して、次の著書がその他の主な参考文献として挙げられる。

- 9) 木村尚三郎 (1974)：『ヨーロッパとの対話』, 日本経済新聞社, 217P
- 10) 沼田・君塚・松沢校注 (1974)：『西洋見聞集, 日本思想体系66』, 岩波書店, 685P
- 11) 大嶽幸彦・二木敏篤編著 (1983)：『国際理解としての地理学』, 大明堂, 203P
- 12) 富田 仁編 (1986)：『異文化との出会い』, 三修社, 303P
- 13) 森 亘編 (1988)：『異文化への理解』, 東京大学出版会, 329P
- 14) 藤巻・住原・関編 (1996)：『異文化を「知る」ための方法』, 古今書院, 248P

The Analysis of “Ohbei Kikou”  
—“Reports of Travel on Europe and the United States”—  
from the Angle of Geography  
— focusing on the Case of Eiichi Shibusawa —

Yukihiko OHDAKE\*

**ABSTRACT**

The object of this research consists in the analysis of “Ohbei Kikou”—reports of Travel on Europe and the United States by Eiichi Shibusawa—published in the 36th year of Meiji era (1903).

The author has analysed the contents of “Ohbei Kikou”. He has quoted some examples of geographical matters, and tried to give them some consideration.

---

\* Division of Social Studies, Department of Humanities and Social Sciences